

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：13901

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12197

研究課題名（和文）ラグナータの註釈写本を用いた後期新ニヤーヤ形而上学の研究

研究課題名（英文）A Study of the Later Navya Nyaya Metaphysics based on Raghunatha's Commentarial Works

研究代表者

岩崎 陽一（Iwasaki, Yoichi）

名古屋大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：40616546

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、16世紀ベンガルの学者ラグナータの形而上学を、主に未出版の註釈文献に依拠して検討し、それを思想的・哲学的に再評価しようとするものである。研究成果として、依拠した註釈文献の翻刻と解説を行ったほか、ラグナータの時間論と力能論の研究を通して得られた理解と展望を論文として出版した。そこでは、時間論を含む種々のラグナータの形而上学的議論が「同種因果の法則」（原因と結果の同種性）の是非に帰着すること、そしてそれがウダヤナにおいて世界の因果的秩序の問題と関わることなどを指摘した。また、ラグナータの主宰神論と関連して、マハーバータの運命論とカーラヴァータを因果論の観点から検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては、ラグナータの形而上学を12世紀からの先行思想との連続性の上で捉えることで、その革新性についての評価を批判的に見直すことができた。また、時間論や力能論といった形而上学の個別かつ煩瑣な議論が少数の根源的問題に還元可能であること、またその根源的問題はそれほど煩瑣でなく、宗教的・社会的な問題意識と接続していることを示したのは、形而上学と社会とをつなぐ研究のひとつの実践となったといえるだろう。

研究成果の概要（英文）：This study aims to examine the metaphysics of the 16th-century Bengali scholar Raghunatha, primarily relying on his unpublished commentarial text called Nyayalilavatiprakasadhiti, with the intention of reevaluating it from a historical and philosophical perspective. As a result of the study, I transcribed the text and published papers presenting the understanding and prospects obtained through the investigation of Raghunatha's theories of time and causality. Those papers described that various metaphysical discussions by Raghunatha were shown to ultimately revolve around the question of the metaphysical rule that I call the law of homogeneous causation, and that this rule is relevant to the issue of the order of the world in Udayana's metaphysics. Furthermore, in respect to Raghunatha's theology, I examined the fatalism and the kalavada in the Mahabharata from the perspective of the theory of causation.

研究分野：インド哲学

キーワード：形而上学 時間 神 因果

1. 研究開始当初の背景

世界には何があって何がないのか、そもそも世界とは何なのかといった主題に関する形而上学の問いは、古びてはいるが決して色褪せてはおらず、2010年代の日本ではとくに注目を集め、分析形而上学の入門書が相次いで出版されていた。形而上学は、時代に即した視点と方法とで探求されるべきとき、いつでもひとつひとつに切実な問いを投げかけ、そして世界と自己に関する深い洞察を与える。そのような新しい形而上学の試みが、インド哲学では、16世紀にベンガルの学者ラグナータ・シローマニ (Raghunātha Śīromaṇi) によって為された。ラグナータは『パダールタ・タットヴァ・ニルーパナ』(Padārtha-tattva-nirūpaṇa, 以下「ニルーパナ」) を著してヴァイシェーシカ学派の伝統的な体系を大胆に批判し、この学派の形而上学に大きな変革をもたらしたといわれてきた。この文献については1957年にカール・ポッターが訳註研究を出版しており¹、その概要については夙に知られている。しかし、2008年に至ってそれまで未出版だった註釈が2点公刊され²、より詳しい文献研究が可能になった。また、2013年にはジョナードン・ガネリが、ラグナータの改革がいかなる意味で革新的であったかを評する論文を著し、ラグナータ再評価の口火を切った³。これらの研究を受けて、岩崎は、丸井浩氏(東京大学教授、当時)の研究プロジェクトの一貫として、和田壽弘氏(名古屋大学教授、当時)らとの共同作業で『ニルーパナ』の精読を行った。しかし、最新の資料を用いてもいまだ理解するのに困難な場面が少なくなかった。その原因は、『ニルーパナ』自体の難解さにもあるが、それにまして、ラグナータの著作群の研究が不十分であり、簡潔に過ぎる『ニルーパナ』の言外の意図を汲めるほどには彼の形而上学の全体像が見えていないということがあった。

2. 研究の目的

以上の研究状況を踏まえて、ラグナータ形而上学を思想的および哲学的に俯瞰する視座を得ることを目指す。これにより、16世紀ベンガルに「新しい形而上学」が現れた理由、或いは人間が世界に対する探求の方法を変容させるひとつの契機が見えてくるだろう。

3. 研究の方法

ラグナータの形而上学文献のひとつに、『ニヤーヤリーラーヴァティー・プラカーシャ・ディーディティ』(Nyāyalīlavatī-prakāśa-dīdhiti, 以下『ディーディティ』)がある。これは、12世紀に著されたヴァッラバの形而上学書『ニヤーヤリーラーヴァティー』(以下『リーラーヴァティー』)に対する14世紀のヴァルダマーナの註釈『ニヤーヤリーラーヴァティー・プラカーシャ』(以下『プラカーシャ』)に対する複註である。『ニルーパナ』は独立の著作であり、どのような先行文献を想定して論述を行っているのか明確にならない。一方、『ディーディティ』は12世紀からの議論の連続性を伝えるものであり、ラグナータの論述の背景を明らかにし、『ニルーパナ』での議論を理解する手助けになることが期待できる。実際に、イーサン・クロールはその学位論

¹ Karl H. Potter. 1957. *The Padārthatattvanirūpaṇam of Raghunātha Śīromaṇi: A Demonstration of the True Nature of the Things to Which Words Refer*. Harvard-Yenching Institute studies 17. Cambridge, Mass.: Distributed for the Harvard-Yenching Institute by Harvard University Press.

² Anitā Rājapāla, ed. 2008. *Tārkikaśīromaṇiśrīraghunāthakṛtaṃ Padārthatattvanirūpaṇam (tīkātrayopetam): Śrīraghudevanyāyālanākāṛkṛtā Padārthakhaṇḍanavyākhyā, Śrīrāmabhadrasārvabhaumaviracitaḥ Padārthatattvavivecanaprakāśaḥ, Śrīviśvanāthanyāyapañcānaviracitaḥ Padārthatattvāvalokaḥ*. 2 vols. Dillī: Amar Granth Pablikaśans.

³ Jonardon Ganeri. 2013. "Raghunātha Śīromaṇi and the Origins of Modernity in India." *Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Saṃbhāṣā* 30:55-78.

文のなかで『ディーディティ』における「所有物性」の形而上学的議論を分析しているが⁴、それは、岩崎がかつて検討した『ニルーパナ』の「所有物性」論と相補関係にある⁵。『ディーディティ』は未出版であるが、クロールの使用した写本2本が大英図書館に所蔵されており、岩崎はその画像データを大英図書館から取り寄せ済みである。本研究では、この入手済みの写本の全体を翻刻・解読し、ラグナータ形而上学研究の資料として利用可能な状態にする。

また、上述の文献研究にもとづき、ラグナータ形而上学の特徴を検討する。そのためにまず、『ディーディティ』の比較的始めの方で論じられる主宰神論および時間論を重点的に扱う。ラグナータは、時間、方位、空間という三つの物体をすべて唯一神に還元し、われわれの時間認識や方位認識は主宰神の存在により実現されているとした。この神は、愛や恩寵、救いや信仰といった宗教的概念とは無縁である。このような機能的な主宰神概念をラグナータの独創に帰すことができるか検討する。また、ラグナータの時間論において注目すべき見解に、彼が時間認識を主宰神の機能により説明する一方で、時間の分節を可能にする原理として「刹那」という存在範疇を新たに立てるというものがある。つまり、ラグナータは、「過去」や「未来」といった認識の根拠としての相対的時間と、「1分」「1秒」といった認識が依拠する絶対的時間とを、別の原理として考えている。いずれも『ニルーパナ』でも主張されているが、そこではラグナータの意図をいまひとつ把みきれなかった。新資料を用いてそれがどこまで鮮明になるか、それをこれらの具体的研究を通して実証する。

4. 研究成果

A 文献解読

入手済みの写本2本を用いてテキストを作成した。ひとつを仮の底本と定め、それを翻刻しつつ、もうひとつの写本から異読を拾い、記録していく。岩崎のかつての研究で、翻刻のためのXMLスキーマ (TEI ベース)、およびそれをHTMLに変換するスタイルシートを作成してあったので、それを今回の研究でもそのまま使用した。底本の翻刻にあたっては、大学院生を作業補助に雇用し、下作業を行ってもらった。分からないところは飛ばし、分かるところだけテキストに起こしてもらうという作業である。この補助のおかげもあって、写本をひとつおりに翻刻し、通読することができた。しかし、全体を校訂テキストとして整形するところまでは到達できなかった。その後、他の研究課題のため、複数のテキストを照合して異読を検出するPython スクリプトを作成したので、いずれこのスクリプトを本研究で作成した翻刻データにも適用し、テキスト整備をさらに進めたい。

B 時間論

ラグナータは『ニルーパナ』の「あらたに独立して設定すべき存在範疇」のセクションで刹那を第一に挙げるため、刹那別立説についてはラグナータの特徴的見解として知られている。しかし、今回『リーラーヴァティー』『プラカーシャ』『ディーディティ』と照合したところ、刹那別立説はラグナータ (16世紀) の独創ではなく、『リーラーヴァティー』の著者ヴァツラバ (12世紀) には既に知られていたことが分かった。『リーラーヴァティー』はそれを批判し、註釈『プラカーシャ』はさらにその批判を補強している。そして、ラグナータは『ニルーパナ』において明確に『プラカーシャ』の論点に言及し、それを斥けるかたちで刹那別立説を主張している。これが明らかになることで、少なくとも刹那論に関しては、『ニルーパナ』の著作意図の理解を改

⁴ Ethan Saul Kroll. 2011. *A Logical Approach to Law*. Dissertation to the University of Chicago, December 2010. Miami: ProQuest.

⁵ 岩崎陽一 2015 「所有と相続の形而上学」『インド哲学仏教学研究』22:69-89.

める必要が生じる。従来、『ニルーパナ』は、ヴァイシェーシカ学派の伝統的体系を一刀両断にする革新的・革命的な著作として捉えられてきたとあってよいだろう。おそらくそのような印象にもとづいて、Potter (1953:3) は "In the *PTN* Raghunātha strikes devastating blows at the whole categorial framework of the old Vaiśeṣika system, ..." と評したと考えられる。しかし、刹那論については、ラグナータの議論は『プラカーシャ』の問題点を指摘・解消するものであり、それ以前から続いてきたヴァイシェーシカ学派の理論改良作業の延長線上にあるといえる。ラグナータの刹那論は、先行する議論史の緻密な理解を前提としており、際立つのは、ラグナータの大胆さよりも技術的洗練である。伝統説を拒絶する姿勢もラグナータのみに見出されるものではない。ラグナータの形而上学は、これまでのように 1000 年前の文献と対照して革新性を指摘するだけでなく、ラグナータに先行する数百年の議論史を踏まえたうえで彼の意図を汲む必要があるだろう。

ラグナータの刹那論について、これらの資料を用いて総合的に検討すると、この議論は結局のところ「多様な原因から等質な結果が生じることを認めるか否か」という、よく知られたインドの因果論の問題に帰着することが分かる。刹那論の中心にあるのは、ひとほどのようにして時間を計測しているのかという問いである。時間それ自体は永遠にして不動の存在であるので、何か他の無常にして動的な存在を指標に時間を分節しなければならない。伝統的には、その分節は太陽の運行といった運動の観察によりなされるとされている。ラグナータも、そのようにして時間を計測することを否定することはない。太陽が1周したら1日、という計測は直観的に否定し得ないだろう。では「1瞬」を計測するにはどうしたらよいか。現代ならば、時計の秒針の動きなどによって計測するかもしれない。しかし、ラグナータが問題視するのは、そのような1瞬の動きは多様であるけれど、それらによって常に均質な「1瞬」が計測されるという事態である。或る1回の瞬間的運動と、それと別の機会の瞬間的運動は、異なる運動である。しかし、もしそのいずれからとも1瞬という均質な時間が計測されるとするならば、多様な原因から等質な結果が生じていることになる。ラグナータはこれをどうしても認めない。結果が等質であるなら、原因も等質でなければならないというのが彼の前提である。したがって、あらゆる1瞬の計測において常に参照される等質な存在として「刹那」というエンティティの实在が想定される。このようにラグナータの議論を捉えるとき、「結果が等質であるなら原因も等質でなければならない」という法則（以下これを「同種因果の法則」と呼ぶ）がなぜ前提とされるのかが次の問題となる。本研究は、この法則の検討へと移行した。

C 力能論

薪が燃えて炎が発生するとき、これは薪が炎の原因となっているのか、それとも薪に「燃焼力」とでも呼ぶべき不可視の力能が備わっており、それが炎の原因となっているのか。これは、インドの形而上学でたびたび論じられてきた問題である。その議論史を分析すると、議論は主にふたつの論題に帰着することが分かる。ひとつは無が有を生みうるか否かという論題、もうひとつは上述の同種因果の法則である。

前者、すなわち無の因果効力に関しては、ミーマーンサー学派のシャーリカナータ（9世紀）やヴァイシェーシカ学派のシュリーダラ（10世紀）が興味深い議論を行っている。火が燃焼を引き起こすとき、燃焼を防ぐ呪文を唱えるとそれを止めることができるので、「呪文の無」もまた、火と同じように燃焼にとって必要である。しかし、無が有を生むことを認めないミーマーンサー学派としては、呪文の無にそのような因果効力があるとは考えない。シャーリカナータは、火に燃焼の力能があり、呪文にはそれを打ち消す力能があるという説明をする。一方、無に因果効力を認めることに躊躇のないヴァイシェーシカ学派のシュリーダラは、呪文の無が燃焼の原因であるとする。この文脈において、シュリーダラは同種因果の法則を明確に否定する。或る場

合には無が燃焼の原因であり、他の場合には有がその原因であるとして、なんの問題があるかと言ひ、「結果が単一の在り方をしていても、原因総体に違いがあることが経験的に知られている」とする。

学派の理論的基盤のひとつである同種因果の法則を明確に否定するシュリーダラは、或いはラグナータ以上に革新的かもしれない。一方のラグナータは、この法則について一步も譲らない。中世ヴァイシェシカ学派の巨人ウダヤナ（10-11世紀）は、「因果関係は種と種の間認められるべきである」という論拠でこの法則を論証する。因果関係が個物間に成立するものであるならば、因果関係は法則としての意味を為さず、それにもとづく如何なる推理も成立しない。では、多様な原因から等質な火が生じる現象をどう説明するか。ウダヤナに続くガンゲーシャ（14世紀）は、実は、原因の種に応じて、結果の火の側にも不可視の種別が存在するという、なかなか説得力に乏しい主張を行う。ラグナータはそれをよしとしなかったのであろう。彼はついに、力能の実在性を否定する学派の伝統を斥けて、宿敵ミーマーンサー学派に倣い、多様な原因に共有される単一の力能の実在を認めるに至った。同種因果の法則は、ラグナータにとってそれほど重要な基盤だったといえるだろう。

ひとつの結果を達成するにはさまざまな手段がある、というのはおそらく誰もが経験的に知っていることであり、同種因果の法則は直感に反する。この法則はなぜそこまで強固に守られるのか。以上の研究結果より、このような問いが導かれた。しかしこの問いに正面から答えを与える文献にはいまだ出会っていない。ひとつのヒントとして、ウダヤナが『ニヤーヤ・クスマーンジャリ』で行っている議論が注目に値する。彼は同書の第1篇でこの法則を論じるが、それは世界の因果的秩序と主宰神の存在証明に関係している。同種因果の法則は、世界が因果的に秩序だっていること、すなわち現象が無原因に生じたり、無関係な原因から生じたりしないことの理論的根拠となる。そして、世界が因果的に秩序だっていることは、主宰神の存在証明のひとつの礎となっている。この観点からウダヤナの議論を洗い直すことは、他の研究課題の仕事として進めている。

D 主宰神論

研究計画に従って『デーディティ』の主宰神に関するセクションを精読したが、期待していたような、『ニルーパナ』の機能的な主宰神観の理解を深める論述は得られなかった。そのため、まったく異なる方向から、『ニルーパナ』の主宰神観の起源を探ることにした。ラグナータは、ベンガルのクリシュナ信仰の宗教家チャイタニヤと同じ学び舎で教育を受けた、という言い伝えがある。たとえこれが事実でないとしても、チャイタニヤと同じ地域・同じ時代に活動したことはおそらく確かであり、チャイタニヤの宗教を育んだ空気にラグナータも親しんでいたことは事実であろう。したがって、チャイタニヤの宗教に、ラグナータの主宰神観とつながるものがあるかもしれない。先行研究によれば、そこにはたしかに、最高神をブラフマンという抽象的・機能的な根本実在と同一視する思想が見られるようである⁶。本研究の一部としてチャイタニヤを詳しく研究する余裕はないが、今後調査を深めれば、さらなる発見が見込めるだろう。

一方、ヴィシュヌ教における時間・空間と主宰神の同一視と類似する思想として、バガヴァッド・ギーターのカーラヴァーダ（時間＝主宰神説）に着目し、両者の比較検討をするべく、カーラヴァーダの調査を行った。これは結果としてとくに指摘すべき関係を見出すに至らなかったが、マハーバーラタ及びバガヴァッド・ギーターに見られる業論と運命論について、因果論研究の成果とも関連させつつ論じ、いくつかの派生的な研究成果を生み出すことができた。

⁶ 橋本泰元 1989 「伝記に見られるチャイタニヤ（Caitanya 1486-1533）の思想」『印度學佛教學研究』37(2): 938-942.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 岩崎陽一	4. 巻 65
2. 論文標題 新ニヤーヤ学派とプラバーカラ派の力能 (sakti) 論争	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東海佛教	6. 最初と最後の頁 未確認
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yoichi Iwasaki	4. 巻 37
2. 論文標題 Raghunatha's Metaphysics of a 'Moment'	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Nagoya Studies in Indian Culture and Buddhism: Sambas	6. 最初と最後の頁 35-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩崎陽一	4. 巻 68(2)
2. 論文標題 「一瞬」を測る方法 新ニヤーヤ学派における刹那の形而上学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 印度學佛教學研究	6. 最初と最後の頁 23-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4259/ibk.68.2_1084	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩崎陽一	4. 巻 -
2. 論文標題 因果応報と運命 予測が意味をなさない世界における行為規範	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 予測と創発 理知と感情の人文学	6. 最初と最後の頁 83-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 岩崎陽一
2. 発表標題 生成力 (sakti) 論争 プラバーカラ派と新ニヤーヤ学派を中心に
3. 学会等名 東海印度学佛教学会第67回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩崎陽一
2. 発表標題 新ニヤーヤ学派における刹那 (ksana) の存在論 ラグナータの議論を中心に
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第70回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩崎陽一
2. 発表標題 後期新ニヤーヤ学派における解脱の方法 ヴァラナシでの絶命と解脱の関係を中心に
3. 学会等名 東海印度学仏教学会第64回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yoichi Iwasaki
2. 発表標題 Death in Varanasi: Reasons to Be Religious in Navya Nyaya
3. 学会等名 The 17th World Sanskrit Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩崎陽一
2. 発表標題 ヴァイシェーシカ学派の世界制作者論証における因果律の問題
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------